

「お念仏の生活」

長島 紘和

昨年4月12日の夜のことでした。私の小中学校の同級生で無二の親友のY君から電話がありました。電話の声はか細く途切れ途切れのものでした。「今日主治医から『あなたの余命はあと3ヶ月です』と告げられ、ショックだった。君に聞いてもらいたいことがたくさんあるので、東京まで出向いてくれ」ということでした。私には大きな衝撃でした。

彼は2年前に胆嚢^{たんのう}ガンの手術を受け、その後は体調もよく、口癖のように「仏様に助けてもらった」と喜んでいました。しかし、一昨年暮れには新たに肝臓^{かんぞう}にガンが発見され治療中と聞いてはいました。

電話の翌日、急ぎ上京し、旧友を見舞いました。新幹線の中ではどのように言葉をかけようかと思ひ悩みました。病室に入ると、かなり衰弱した彼の姿が目に見え込んできました。待ちかねたように彼は力を振り絞って^{とつとつ}自分の思いを語りました。最後に、「俺は間もなく命が終わる。『古稀^{こき}』という言葉があるが、よくぞ72歳まで生かして下さった。仏に感謝している。念願だったインドにも行き、お釈迦様にも会わせてもらった。また、蓮如上人や親鸞聖人の御遠忌にも巡り合え、いくつか浄土真宗の書物も読ませていただき、如来の本願やお念仏について教えていただいた。病気は治らないが、俺は如来の本願に抱かれて、お念仏を称え生かさせていただく」。ベッドの上の両手には念珠がしっかりと握られていました。話を聞き終わって目頭が熱くなりました。彼はそれから1ヶ月後にお浄土に還りました。

「お念仏申しなさい」「お念仏によって必ず救われますよ」。私達は如来のお呼び掛けのお念仏をしっかり受け止めたい。お念仏させていただく中に私のいのちの本当の安らぎの場があるということ、これが救いであると味わいたいと思います。